

大阪モーツァルトアンサンブル

第60回定期演奏会

2014年12月21日（日）午後3時

豊中市立アクア文化ホール

《Programm》

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

Maurerische Trauermusik c-moll KV 477 (479a) (1785)

フリーメイソン葬送音楽 八短調

Adagio

Chöre und Zwischenaktmusiken zu dem heroischen Drama Thamos, König in Ägypten KV 345 (336a) (1773/79)

英雄劇「エジプトの王ターモス」のための合唱と幕間音楽

Erster Aufzug 第1幕

Nr. 1 Schon weichet dir, Sonne!: Maestoso

Nr. 2 Maestoso - Allegro

Zweiter Aufzug 第2幕

Nr. 3 Andante

Dritter Aufzug 第3幕

Vierter Aufzug 第4幕

Nr. 4 Allegro - Allegretto - Andante - Più Andante - Più Adagio - Allegretto - Adagio

Nr. 5 Allegro vivace assai

Fünfter Aufzug 第5幕

Nr. 6 Gottheit, über alle mächtig!: Adagio maestoso - Allegro vivace - Allegretto -
Allegro vivace - Moderato

Nr. 7a alla breve

Nr. 7 Ihr Kinder des Staubes, erzittert und bebet. (Der Oberpriester): Andante moderato -
Allegro

..... 休憩 Pause

Die zauberflöte KV 620 (1791)

魔笛

Ouverture 序曲

Adagio - Allegro - Adagio - Allegro

Erster Aufzug 第1幕

No. 1 Introduction Zu Hilfe! zu Hilfe! sonst bin ich verloren (Tamino, Drei Damen):
Allegro - Allegretto - Allegro

No. 2 Aria Der Vogelfänger bin ich ja (Papageno): Andante

No. 3 Aria Dies Bildnis ist bezaubernd schön (Tamino): Larghetto

No. 4 Recitativo ed Aria O zittre nicht, mein lieber Sohn (Königin der Nacht):

Allegro maestoso - Andante - Allegro moderato

No. 7 Duetto Bei Männern, welche Liebe fühlen (Pamina, Papageno): Andantino

Zweiter Aufzug 第2幕

No. 9 Marcia

No. 14 Aria Der Hölle Rache kocht in meinem Herzen (Königin der Nacht): Allegro assai

No. 17 Aria Ach ich fühl's, es ist verschwunden! (Pamina): Andante

No. 18 Chor der Priester O Isis, und Osiris, welche Wonne! (Priester): Adagio

No. 20 Aria Ein Mädchen oder Weibchen wünscht Papageno sich! (Papageno):

Andante - Allegro - Andante - Allegro - Andante - Allegro

No. 21 T. 190 Der, welcher wandert diese Straße voll Beschwerden (zwei schwarz geharnischte Männer): Adagio

No. 21 T. 362 Marsh Wir wandelten durch Feuersgluten (Pamina, Tamino): Adagio

No. 21 T. 390 Triumph, Triumph, Triumph, du edles Parr! (Chor): Allegro

No. 21 T. 413 Papagena! Weibchen! Täubchen! Meine Schöne! (Papageno, Drei Knaben, Papagena): Allegro - Andante - Allegretto

No. 21 T. 822 Recitativo Die Strahlen der Sonne vertreiben die Nacht (Sarastro): Maestoso

No. 21 T. 828 Heil sei euch Geweihten! (Chor): Andante - Allegro

《Einführung》

大阪モーツァルトアンサンブル

Indentant:	武本 浩				
Konzertmeister:	大西 正人				
1. Violine:	大屋 美代子	久保 聡一	小谷 健	高橋 淑子	
2. Violine:	濱田 利正	田邊 明子	筒泉 直樹	藤井 聡子	藤井 裕雄
Bratschen:	能勢 徹	河合 士郎	上田 秀樹		
Violoncelli:	加納 隆	岩田 暢子			
Kontrabaß:	大川 宏明				
Flöten:	宮脇 かおり	門司 真美			
Oboen:	小林 靖之	利谷 久美			
Klarinetten:	柳楽 由美子	向 朱理			
Bassetthörner:	鬼頭 典子	大倉 久和	柳楽 由美子		
Fagotte:	尾家 祥介	服部 真貴子			
Kontrafagott:	松島英雄				
Hörner:	加藤 仁	中根 慎介			
Trompeten:	山崎 雅夫	中嶋 香織			
Pauken:	木村 祐				
Posaunen:	黒田 真史	石井 倫太郎	中田 雅之		
Celesta:	園田文子				



1984年、大阪大学大学院生を中心に発足。以後、京阪神の各大学オーケストラOBを結集し、年間4~5回の演奏活動を続けている。指揮者を置かずに自発的なアンサンブルの実現を目指す。演奏会では主にモーツァルトの作品を取り上げ、最新の研究成果に基づいて編纂された原典版を使用し、当時の一般的な編成で演奏している。1986年6月に行った特別演奏会では、ヴィーン・フィルのアルフレート・プリントツ氏、アダルベルト・スコッチチ氏等と共演し、好評を博した。1986年から1990年にスベトラ・プロティッチ氏と4度共演。1988年5月には、小山亮氏と新モーツァルト全集版によるホルン協奏曲全曲をレコーディングした。1989年から1994年、関西モーツァルト協会例会に7度出演。1991年12月5日、大阪カテドラル聖マリア大聖堂におけるモーツァルト没後200年記念追悼ミサでレクイエムを演奏した。1995年にはザルツブルク大聖堂でミサに出演、モーツァルトウム大ホール、ヴィーン・ミラーテン教会で演奏会を行った。1996年から2000年にかけてモーツァルト劇場例会に5度出演。1994年から亀岡混声合唱団と21回共演。2004年、指揮者なしでのモーツァルト交響曲全曲演奏会を完結した。

《Einführung》

ごあいさつ

大阪モーツァルトアンサンブル 武本 浩

本日は、大阪モーツァルトアンサンブル創立30周年記念第60回定期演奏会にお越しいただき、誠にありがとうございます。これまで細々ながら演奏活動をしてこられたのも皆さまのご支援の賜物と心より感謝申し上げます。2014年もあと残すところわずかとなりましたが、今年は悲しい出来事がございました。3月18日、高橋英郎先生が82歳で逝去されました。先生が翻訳された膨大なモーツァルトの手紙を読んでいると、あたかもモーツァルトがすぐそばにいるような錯覚を感じます。モーツァルトの日本語オペラに対する高橋先生の情熱。私たちは20年前から高橋先生から直接ご指導をいただき、非常に多くのことを学びました。高橋先生が主宰するモーツァルト劇場の例会でカトリック麻布教会や六甲教会で共演した八短調ミサ曲や戴冠式ミサ曲のこと、びわ湖ホールで上演したフィガロの結婚など、思い出は尽きません。8月13日には、古楽器演奏家の大家フランス・ブリュッヒエン氏が79歳で、そして、9月24日には11月に来日が予定されていたクリストファー・ホグウッド氏が73歳で亡くなりました。彼がエンシェント室内合奏団と録音したオリジナル楽器によるモーツァルトの交響曲全集（全71曲、1978年～1985年）は衝撃的で私たちがモーツァルトの交響曲全曲を20年かけて演奏するきっかけとなりました。先生方のご冥福を心からお祈り申し上げます。

モーツァルトとフリーメイソン

秘密結社フリーメイソンとはいかなるものか。1789年に起きたフランス革命が、フリーメイソンの思想である「自由・平等・博愛」を掲げて、ラファイエットやロベスピエールといったフリーメイソンの指導者の元で行われたことから、国家転覆を図る地下組織ととらえる向きもある。事実、当時、ヨーロッパ中に広がったフリーメイソンに脅威を感じたローマ教会から1738年に教皇クレメンス12世の名により禁止令が出され、1764年にはオーストリアでも全面禁止になっている。近代フリーメイソンの歴史は、1717年6月24日、聖ヨハネの日に4つのロッジの代表者がグース・アンド・グリドアイアンに集まって設立した「ロンドン・グランド・ロッジ」にさかのぼることができる。フリーメイソンの理想は、人道的であり、博愛心に富み、自分と異なる信仰を持つ人々を受け入れ諸民族を結び合わせるものであった。秘密結社といっても、社交的なもので王侯、君主たちと親しく交流することができた。ドイツでは、啓蒙専制君主であるプロイセン国王フリードリヒ2世（大王）が、フリーメイソンに加入していたし、1780年にマリア・テレージアの後を継いだ神聖ローマ皇帝ヨーゼフ2世もフリーメイソンを保護した。そのため、ウィーンのフリーメイソンのロッジ（分団）には多数の貴族や知識人が集まり、情報交換をするようになった。

1784年12月14日、ウィーンのフリーメイソン結社ツァ・ヴォールテテヒカイト（善行）分団は、同市の他のフリーメイソン分団に向けて楽長モーツァルトを第一位階、すなわち徒弟に推挙したことを通知した。分団番号第20番。1785年1月7日にははやくも第二位階、職人に昇進。2月11日午後1時、父レーオポルトがザルツブルクから上京し、モーツァルトの家に4月25日まで滞在することになる。父も4月6日にツァ・ヴォールテテヒカイト（善行）分団に徒弟として加わり、そのあと4月22日には職人、親方へと昇進した。ヨーゼフ・ハイドンも2月11日の夜にツァ・ヴァーレン・アイントラハト（真の融和）分団に徒弟として入団した。フリーメイソンに入団する際、参入儀礼が行われる。志願者は、身につけている金属を全て外し、目隠しをされ、3度のノック音がするまで待つ。志願者は首にロープをまかれ、「ここに来た目的」を聞かれる。志願者は、「暗闇から脱して光を見るために来た」と答える。火の中を通るなどの試練を受け、3度の音を合図に目隠しが

外され光を見る。

フリーメイソンの二元論は、結社の入口にあるJ（ヤキン）とB（ボアズ）の2本の柱に象徴されている。二元論とは、物事を相対する2つの原理または要素に基づいて説明しようとする考え方である。これらは、「エジプトの王ターモス」や「魔笛」の中で重要な役割を果たしている。

J（ヤキン）	B（ボアズ）
オシリス	イシス
男性	女性
太陽	月
昼	夜
火	水
金	銀
能動	受動
3	5
赤	白または黒
啓発	無駄口
牡牛座	ふたご座
ヒラムのフリーメイソン結社 (男性の伝統的結社)	モプスの結社 (女性の養子結社)

フリーメイソン葬送音楽 八短調 KV 477 (479a)

1785年7月、モーツァルトは、「自作全作品目録」に一つの作品を書き入れた。

フリーメイソン葬送音楽。盟友メクレンブルクとエステルハージーの死去に際して。——ヴァイオリン2、ヴィオラ2、クラリネット1、バセットホルン1、オーボエ2、ホルン2とバス。

ところが、オーストリア帝国陸軍少将だったゲオルク・アウグスト・フォン・メクレンブルク＝シュトレリッツ大公がハンガリーのテュルナウで亡くなったのは11月6日、ハンガリア＝ジーベンビュルゲン地方担当大臣だったフランツ・エステルハージー・フォン・ガラタ伯爵がウィーンで亡くなったのも11月7日。その葬儀あるいは追悼式は、11月17日にフリーメイソンのツァ・ゲクレンテン・ホフヌク（授冠の希望）分団で行われている。なぜモーツァルトは7月と記入したのか。「自作全作品目録」で葬送音楽の次に記載されているのは、7月、クラヴィア四重奏曲ト短調KV 478（自筆譜には1785年10月16日と記載）、続いて、11月5日、オペラ「誘拐された村娘」の四重唱曲KV 479である。もともと親方昇進式典のための男声合唱の音楽として作曲されたものを葬送音楽に仕立て直したのだという説も出されたが、現在ではモーツァルトの単なる記載ミスではないかと考えられている。すなわち、「自作全作品目録」に7月と記載してから11月5日まで何も記載しなかったモーツァルトが、空いたスペースに後で2曲を書き入れたというものである。ザルツブルクに一人で住む父レーオポルトがザンクト・ギルゲンの娘に宛てた手紙によると、この時期、筆まめで几帳面な息子から一向に手紙が届かないことに対して不安と不満を募らせていたが、この時、モーツァルトはフィガロの結婚KV 492の作曲に取り組んでいたのであった。記載ミスは、こ

れと関係があるのかもしれない。

フリーメイスン葬送音楽の自筆譜は、合計5葉からなる五線紙でプロイセン文化財団ベルリン国立図書館に所蔵されている。12段の横長の五線紙の1段目は空白で、2段目と3段目がヴァイオリン、4段目が2本のヴィオラ、5段目と6段目がオーボエ、7段目がB管クラリネット、8段目がヘ音記号で書かれたF管バセットホルン、9段目がEs管ホルン、10段目がC管ホルン、11段目がバスとなっている。これが、「自作全作品目録」に書きこんだときの編成であるが、自筆譜の12段目にはグランファゴットが記載され、別の五線紙に2本のF管バセットホルンがト音記号で記載されている。これらの追記を、ロビンス・ランドンは、当時ヴィーンを訪れていたフリーメイスンでバセットホルンの名手、アントーン・ダーフィットとヴァインツェント・シュプリングラーの影響であると指摘している。ヴィーンの国立古文書館に所蔵されているフリーメイスンの間で回された招待状に次のように記載されている。□館とあるのは関係者にしかわからない隠語で、フリーメイスンの文書でしばしば使われた。

二人の外来の盟友支援のために——二人ともバセットホルンの名手である——。彼らはしばらく前に、当地に避難所を見出すためにヴィーンにやって来られたが、これまでのあいだ勤め口もなく待機しつつ、苦境に陥り、また現在も、そのため母国へと帰旅を決意したにもかかわらず、それを企てることも不可能になっておられる。まこと畏敬すべきツウ・デン・ドライ・アードレルン（3羽の鷲）分団とツム・パルムバウム（棕櫚樹）分団は、来週木曜日10月20日の夜6時半に□館においてコンサートを催し、尊敬すべき盟友モーツァルト氏とシュタードラー氏が演奏を聞かせてくれることとなった。

モーツァルトがこの二人のバセットホルンの名手を知ったことが、その後の作曲活動に影響を与えたことは言うまでもない。12月15日には、ツア・ゲクレンテン・ホフヌンク（授冠の希望）分団でも演奏会が行われた。プログラムは次の通り。

- エステルハーギー伯爵付の音楽監督、盟友パウル・ウラニツキーの交響曲
- 盟友ダーフィットとシュプリングラーによるバセットホルンの二重協奏曲
- モーツァルトのカンタータ「メイスンのよろこび」KV 471およびクラヴィーア協奏曲
- シュタードラーによる6つの管楽器によるセレナード、この曲では、プレスブルクのバティアーニ家楽団のヴィオラ奏者兼クラリネット奏者、盟友ロッツが大きなオクターヴ・ファゴットを演奏した。
- ウラニツキーの第二交響曲もまた、分団のため特別に作曲されたものだった。

テオドール・ロッツは通常のクラリネットの低音域を拡大したバセットクラリネットの製作者として知られているが、大きな（長い）オクターヴ・ファゴットも製作している。フリーメイスン葬送音楽で自筆譜の12段目に追記された「グランファゴット」なる楽器はロッツのオクターヴ・ファゴットと考えるのが自然である。しかし、ロビンス・ランドンは、グランファゴットがコントラファゴット（ダブルバスーン）だとすると第3バセットホルンとの音域差が2オクターヴも離れてしまうため、モーツァルトが本当にコントラファゴットを必要としていたのかわからないとしている。そのため、本日の演奏にあたって、コントラファゴットを使用すべきかどうか迷ったが、グランファゴットは、テオドール・ロッツが作製したオクターヴ・ファゴット、すなわち、現代のコントラファゴットであると考え、これを使用することにした。

「エジプトの王ターモス」のための合唱と幕間音楽KV 345 (336a)

モーツァルトの父レーオポルトが、1773年9月18日、ヴィーンからザルツブルクの妻に宛てた手紙に、「ヴォルフガングはあ

る曲をまったく夢中で作曲しています。」と記している。モーツァルトが夢中で作曲していたのは、「エジプトの王ターモス」のための音楽である。枢密顧問官兼ベーム宮廷宮内庁次官トビアス・フィーリップ・フライヘル・フォン・ゲーブラーによる英雄劇「エジプトの王ターモス」は、1773年にプラハとドレスデンで出版され、1773年12月11日にプレスブルクで上演された。この英雄劇の典拠の一つは、1731年にコレージュ・ド・フランスのギリシア＝ラテン哲学の教授、ジャン・テラッソン神父が執筆した小説「セトスの伝記物語、古代エジプト不朽の奇談の内、…ギリシア語写本の翻訳による」である。「セトス」はエジプトの王子の教育と秘儀への加入、アフリカへの旅を描いており、エジプトの秘儀に関する権威ある書物であった。ドイツ語、英語に翻訳されヨーロッパ中のフリーメイソンのグループで愛読された。ヨーハン・トビアス・ザットラーが、この英雄劇のために2曲の合唱曲を作曲したが、ゲーブラーはこれに不満であったため、ヴィーンを訪れていたモーツァルトに再委嘱したのであった。ゲーブラーは、1773年12月13日、ベルリンのクリストフ・フリードリヒ・ニコライに宛てた手紙で「ターモスのための音楽を同封します。モーツァルトのオリジナルの作品で一つ目の合唱はすばらしい。」と伝えている。1774年4月4日にケルトナートーア劇場でヴィーン初演が行われた折に、モーツァルトの作曲による合唱曲が使用された。「ヴィーン劇場年報」は、「カール・モーツァルト氏〔原文のまま〕の作曲した音楽は美しく書かれている」と賞賛している。その後、1776年1月3日、ザルツブルクでカール・ヴァールー座がこの曲を上演した。その時の様子を、1776年1月17日「週刊ザツルブルク劇場案内」が伝えている。

1月3日。「ターモス」、ゲーブラー男爵による5幕の悲劇。…彼はクロップシュトックにならって古代のコーラスを英雄悲劇の中に取り入れて、筋の面白さをそこなうことなくそれ等を結びつけようとした。コーラスの作曲者は繰り返しによって第5幕を余りに長くしてしまった。コーラスは繰り返しなしで歌われるべきであり、他と代えればもっと良い。又はヴィーンの時のようにコーラスが全くなくても、作品には何等の支障もないであろう。

その後、ヨーハン・ベーム一座が、1779年4～5月、1779年9月～1780年3月にザルツブルクを訪れて、カール・マルティーン・プリューミケの劇「ラナッサ」にターモスの音楽を利用して上演している。その際、モーツァルトの交響曲第26番変ホ長調KV 184 (161a)を序曲として採用した。モーツァルトは1790年9月、フランクフルト・アン・マインで行われたレーオポルト2世の戴冠式の際、この形での上演を見た可能性がある。1791年9月6日には、プラハでレーオポルト2世のボヘミア王としての戴冠式が聖ヴィートゥス大聖堂行われ、この典礼には、サリエリの指揮で、モーツァルトの戴冠式ミサKV 317もしくはKV 337のほか、「エジプトの王ターモス」の最初の合唱の歌詞をラテン語の典礼文に変更したモテット「スプレンデーテ・テ、デーウス」KV Anh. 121などが演奏された。

「エジプトの王ターモス」のための合唱と幕間音楽KV 345 (336a)の自筆譜は、プロイセン文化財団ベルリン国立図書館に所蔵されている。幕間音楽（第2～5曲）は横長の五線紙に書かれており、その大半が「聖体の祝日のためのリタニア」KV 243（1776年3月作曲）や歌劇「羊飼いの王様」KV 208（1775年4月作曲）の序曲を独立した交響曲に仕立てるために作曲したフィナーレKV 213c（1775年の8月に作曲と推定）と同じ五線紙が使用されている。ただし、第7a曲だけは異なる五線紙で、デイヴェルティメントKV 251（1776年7月作曲）や1776年4月の日付がある教会ソナタKV 244、KV 245で使われた五線紙である。そのため、ヴォルフガング・プラートは、幕間音楽は、1777年9月～1779年1月のパリ・マンハイム旅行より前、1777年頃に作曲されたと推定している。一方、縦書きの五線紙に書かれた合唱曲（第1曲、第6曲、第7曲）は幕間音楽の筆跡とまったく異なっていることから、1779年以降に作曲されたと推定した。しかし、アラン・タイソンの五線紙に入れられた透かし模様の研究から、この五線紙は1776年、KV 244、KV 245、KV 251に使われたものと同じものであることが判明している。

この曲に関する資料が余りにも少ないため、不明な点が多い。1776年1月17日の批評にある「コーラスの繰り返しで第5幕を余りに長くしてしまった。ウィーンの時のように無くても支障がなかった。」という指摘は、第6曲を指していると思われる。従って、1776年の演奏時には、少なくとも第1曲から第6曲が作曲されていたことになる。注目すべきは「ウィーンの時」はコーラスがなかったという点である。「ウィーンの時」とは、1774年4月4日である。オーストリア国立図書館所蔵の手書楽譜に1773年作曲の可能性のある第1a曲と第6a曲がある。前者は、自筆譜の第1曲とかなり類似しており完成しているが、後者は、第6曲と同じモチーフが使われているものの、アダージョ・マエストロソではなくアレグロ・モデラートで書かれ、121小節の未完で終わっている。いずれの曲もフルートは含まれていない。ゲーブラーが、1773年12月13日、ニコライに送った楽譜は完成した第1曲のみで、第6曲は完成できず「ウィーンの時」には演奏されなかったのかもしれない。フィナーレを飾る第7曲には、ゲーブラーの原作にはない詩が使われている。これは、ヨハン・アンドレアス・シャハトナー（モーツァルトが幼少の頃になついていたヴァイオリンも弾く宮廷トランペット奏者で、モーツァルトは彼のとろけるような柔らかいヴァイオリンをバターのヴァイオリンと呼んでいた）によるものだと言われているが、これがいつ追加されたのか分かっていない。また、第7a曲の第1頁のみに大きく×印が入られている。これがモーツァルトの手によるものなのか不明である。この曲は、第5幕の中で使用するために作曲されたもので、レーオポルトモーツァルトの手で「フェーロンの絶望、神の冒瀆と死」との書き込みがあり、第18小節には雷雨の始まりとの記入があるため、今回は演奏曲に含めることにした。

私なりに整理をしてみると、1774年4月4日のウィーン初演時には、第1曲から第5曲までが作曲されていた。1776年1月3日、ザルツブルクでカール・ヴァールー一座が上演した時は、繰り返しのある第6曲が追加された。そのうち1775年に書かれた曲が自筆譜として残っているのは、第2曲から第5曲。フルートを追加した合唱曲（第1曲、第6曲、第7曲）も書かれたはずであるが、不評だった合唱曲を改訂したためか、あるいは、合唱曲だけ別の目的に転用したためか、1779年にザルツブルクを訪れたヨーハン・ベーム一座のために、合唱曲を再度書きなおした。その際、他の曲と体裁を整えるために、1775年の作曲時と同じ種類の五線紙が使われた。作曲を手掛けてから10年たってもモーツァルトのこの曲に対する想いは萎えることはなかった。1783年2月15日、ウィーンに住むモーツァルトからザルツブルクの父に宛てた手紙には次のように記されている。

親愛なお父さん！

お送りくださった音楽に心から感謝しています！——ぼくが『ターモス』のために書いた曲を活用できないのは、とつても残念です！——でも、この作品は、当地では気に入られなかったため、不評作の仲間入りをしました。再演されることはないでしょう。——ただちに音楽だけのためならば、再演奏されることもあるでしょう。——でも、それは多分むづかしいでしょう。——実に残念です！——

前述したとおり、レーオポルト2世がポヘミア王としての戴冠式を執り行った際、モーツァルトの期待にこたえて、サリエリが第1曲の替え歌を演奏した。「スプレンドエンテ・テ、デーウス」ハ長調KV Anh.121である。その後、第6曲は「イエス、レックス・トレメンデ・マジスター・ティス」ニ長調KV Anh.123、第7曲は、「ネ・ブルヴィス・エ・チニス」ニ短調KV Anh. 122として、モーツァルトの死後、出版された。それでもめったに演奏されることのない名曲。——実に残念です！——

登場人物

- ◇ ターモス： 賢明なメーネス王をおとしいれ王位についた亡父ラメセスの後を継ぐ、父とは正反対の徳の高い若者
- ◇ ゼートス： ラメセスに敗れたメーネス本人、太陽神殿の僧として身を隠して生き延びている
- ◇ ザーイス： ゼートス（メーネス）の娘タルシス、彼女もまた偽名で暮らしている

- ◇ 太陽神殿の乙女たちと僧侶たち
- ◇ フェーロン： エジプトの王侯でザーイスが先王の娘であることを知っており、彼女を利用して王位をねらっている
- ◇ ミルツァ： 太陽神殿の乙女たちの監督者、フェーロンの叔母
- ◇ ミューリス： ザーイスの親友、ザーイスはターモスに恋をしていることを打ち明ける

= 第1幕 =

エジプトの権力争いで人々から敬愛されていたメーネス王はラムセスの陰謀で王位を奪われてしまった。メーネスは、世の中の混乱を避けるために太陽神殿の僧として名前をゼートスに変えて身を隠している。ところが、人々はメーネス王とその娘タルシスは死んだと思いこんでいる。ラムセスが亡くなり、その息子のターモスが王位につくことになった。そこで、ゼートスはターモスが即位する戴冠式の準備をする。太陽神殿のなかで、乙女たちと僧侶たちのおごそかな合唱で幕があける。「光の敵である夜は太陽に道を譲る、エジプトよりいけにえが、もたらされる。願いを聞き入れたまえ、ターモスの民の上に晴れやかな日々をもたらしたまえ」と歌いあげる。

(第1曲) Maestoso C-Dur

ひそかに王位を狙っているフェーロンは、フェーロンの叔母で太陽神殿の乙女たちの監督者であるミルツァと策略をめぐらしている。先王の娘ザーイスとフェーロンを結びつけて王位を奪おうと考えているのだ。第1幕と第2幕の間に演奏される幕間音楽（第2曲）には、モーツァルトの父、レーオポルトが楽譜に「第1幕は王座につこうというフェーロンとミルツァのはっきりした決意で閉じられる」と注釈を加えている。

(第2曲) Maestoso-Allegro c-moll

= 第2幕 =

太陽神殿の乙女たちの家。ゼートスの娘ザーイスは、親友のミューリスにターモスに恋していることを打ち明ける。ターモスもゼートスを愛している。そこでミルツァは、ターモスはミューリスを愛していると吹聴し、ザーイスはフェーロンを愛しているとターモスに告げる。第2幕と第3幕の幕間音楽（第3曲）にも「ターモスの善良な性格は第2幕の最後に示される。」というレーオポルトの書き込みがある。曲の中にも弦楽器の厳しい口調の所で「フェーロンの偽りの性格」、オーボエの独奏部に「ターモスの誠実さ」という注釈が記入されている。

(第3曲) Andante Es-Dur

= 第3幕 =

レーオポルトの注釈によると、第3幕は、「ターモスと反逆者フェーロンで始まる。ミルツァとフェーロンの語らい。」とある。ミルツァはザーイスが先の王の娘タルシスであり、女王となる運命であることをフェーロンに打ち明け、フェーロンは王位を奪うことを固く決心する。それにもかかわらず、ターモスはフェーロンを友として信じ込み、軍の総司令官に任命するのだ。

= 第4幕 =

第4幕はメロドラマである。メロドラマとは、ギリシャ語で歌を意味するメロスと劇を意味するドラマが結合した言葉で、音

楽にのせて台詞をいう劇である。フェーロンとミルツァの陰謀を表現する前奏で始まり、太陽の乙女たちの住居から出てきたザイスがあたりに誰もいないことを確認する。ターモスへの愛、父、祖国への忠誠の間で揺れる気持ちを述べ、ターモスと結ばれないなら太陽神に献身するという神聖な誓いを立てるためにひざまずく。ザイスの動揺や悲痛な心情、葛藤の末の光が音楽で表現されている。

(第4曲) Allegro c-moll

その後、ターモスはフェーロンの裏切りに気付き、フェーロンの陰謀を阻止する。第4幕と第5幕の幕間で演奏される第5曲に記載されたレーオポルトの注釈には、「第4幕は大変な混乱のうちに閉じられる」とある。

(第5曲) Allegro vivace assai d-moll

=第5幕=

神殿に太陽の乙女たちと僧侶たちがターモスの戴冠式のために集まっている。ターモスを讃える壮麗な合唱が始まる。

(第6曲) Adagio maestoso D-dur

ゼートスが戴冠式の祭典を始め、ターモスが王であることを公式に宣言する。そこに、フェーロンとミルツァが、先の王の娘タルシスこそが真の王位の後継者であることを民衆に呼び掛ける。この混乱を鎮めたのがゼートスである。ゼートスは自分が先の王メーネスであると明かし、ターモスとザイスは結ばれる。

(第7a曲) (alla breve) d-moll

(第7曲) Andante moderato d-moll

陰謀が失敗に終わったミルツァは自害し、フェーロンは神々を冒瀆し雷で焼き殺される。それを表したのが第7a曲である。その後、ゼートスが神への冒瀆をいさめる荘厳な独唱ではじまる第7曲に続き、神を讃えてこの英雄劇の幕を閉じる。

本日の演奏では、コーラスの位置をオーケストラの前にしている。これは、ヨハン・ペーター・ザーロモンの招きでイギリスに渡ったヨーゼフ・ハイドンが、1791年から1793年にかけてロンドンでハイドン＝ザーロモン・コンサートを行った際の配置である。コンサートマスターのザーロモンとフォルテピアノを演奏したハイドンがオーケストラの指揮をした。

魔笛 KV 620

1791年春、モーツァルトはヴィーン郊外のフライハウス劇場（ヴィーデン劇場ともいう）の興行主で俳優、台本作家のエマヌエル・シカネーダーに同劇場で上演するドイツ語のオペラの作曲を依頼された。6月11日、モーツァルトがヴィーン近郊のバーデンで湯治療養している妻のコンスタンツェに宛てた手紙に、午前4時半に起床したモーツァルトが魔笛の1曲を作曲したとある。その1週間後、モーツァルトはバーデンに行き、妻の世話をしてくれている当地の教区教会の聖歌隊指揮者アントーン・シュトルのために「アヴェ・ヴェルム・コルプス」に長調 KV 618を作曲した。7月2日にヴィーンから妻に宛てた手

紙の中で、これから自分の手で「魔笛」の第1幕を完成させるつもりであることを伝える。

あのとんまのジュスマイヤーに伝えてほしい。第一幕のスコアを、導入曲からフィナーレまで送ってくれと。ぼくはそれでオーケストレーションをする。彼があすの朝、始発の馬車で発てるよう、きょうにも荷造りしておいたほうがいい。そうすれば、ぼくはお昼にはそれを手にすることができる。

7月3日付けの妻への手紙でフィナーレが届いたことを伝えていることから、コンスタンツェがモーツァルトの手紙を受け取る前にフィナーレを発送していたようである。7月5日付けの手紙では、手伝ってくれているジュスマイヤーを催促するよう伝えている。

ジュスマイヤーはぼくの楽譜の4番と5番を送り返してほしい。——すでに頼んであるものと一緒に。そして彼にぼくの尻をなめなさいかんと伝えておいてくれよ。

そして、ついにモーツァルトは「自作全作品目録」に次のように記載する。

7月、魔笛。——9月30日に上演 — — — — —
—— — — — — 2幕のドイツ語オペラ。エマヌエル・シカネーダーによる。22曲から成る。——女性。——ゴットリーブ嬢、ホーファー夫人、ゲルル夫人、クレップフラー嬢、ホーフマン嬢。男性。シャック氏、ゲルル氏、シカネーダー兄氏、キストラー氏、シカネーダー弟氏、ヌーズール氏。——合唱。

9月30日に上演したオペラを7月に完成したと書き込んでいる。これも本当に7月に記入したのだろうか。魔笛の次に「自作全作品目録」に記入したのは、9月5日。そこには、「9月6日、プラハにて上演。ティート帝の慈悲。レーオポルト2世皇帝陛下の戴冠式のための2幕のオペラ・セリア。」とあり、出演者と曲数が記載されている。その次は、9月28日。

9月28日
オペラ、魔笛のために——祭司たちの行進と序曲。行進曲と序曲

9月30日の上演のために序曲と第2幕の冒頭を行進曲を最後に書いてオペラは完成した。おそらく7月には序曲と行進曲以外は仕上がっていたのであろう。しかし、すぐには上演されず、レーオポルト2世のボヘミア王としての戴冠式を祝うオペラの作曲を委嘱されたため、なんとしても新しい皇帝に自分を売り込みたいモーツァルトは、8月から9月の間、そちらに集中することになった。そして、9月30日金曜日19時から「魔笛」の初演が行われた。初演の際、夜の女王を歌ったのは、



ホーファー夫人、すなわち、コンスタンツェの姉ヨゼーファであった。パパゲーノはシカネーダー。プログラムには、「音楽は楽長で現職皇王室宮廷作曲家のヴォルフガング・アマデー・モーツァルト氏による。モーツァルト氏は、好意あり尊敬に値する観客に対する敬意と台本作家に対する友情から、本日はみずからオーケストラの指揮をとる。オペラ台本には2枚の銅版画がつけられているが、そこではシカネーダー氏が実際の衣裳をつけたパパゲーノ役で版刻されていて、劇場の切符売り場で30クロイツァーで販売される。」と記載されている。モーツァルトは初演と2度目の上演を指揮したのみで、それ以降は、ヴィーデン劇場の常任指揮者ヨーハン・バプティスト・ヘンネンベルクに譲った。この劇場のオーケストラの編成は、5名の第1ヴァイオリン、4名の第2ヴァイオリン、4名のヴィオラ、3名のチェロ、3名のコントラバス、1対のフルート、オーボエ、クラリネット、ファゴット、ホルン、トランペット、3本のトロンボーンとティンパニの総勢35名であった。

登場人物

- ◇ ザラストロ： ゲルル氏・・・「叡智の神殿」の支配者、太陽のシンボル。名前はゾロアスター（ツァラトゥーストラ）に由来。
 - ◇ タミーノ： シャック氏・・・きらびやかな日本の*狩衣をまとっている王子。手には弓を持っているが矢はない。夜の女王の侍女から金の笛が渡される。
 - ◇ 弁者： ヴィンター氏・・・フリーメイソン結社のヒエラルキーに実在する。入門志願者の案内役を兼ねる。
 - ◇ 3人の祭司： シカネーダー兄氏、キストラー氏、モル氏・・・ランタンの大きさの透明なピラミッドを持っている。
 - ◇ 3人の童子： ザラストロの3人の男の子。薔薇の花に覆われた空中船に乗ってくる。銀色の椰子の枝を持っている。
 - ◇ 夜の女王： ホーファー夫人・・・夫が死の床でザラストロに渡してしまった太陽の世界を取り戻したがっている。
 - ◇ パミーナ： ゴットリーブ嬢・・・夜の女王の娘。墓標として使われる糸杉の林がお気に入り。
 - ◇ 3人の侍女： クレップフラー嬢、ホーフマン嬢、シャック夫人・・・夜の女王に仕えるヴェールをかぶった侍女で銀の投槍を持っている。
 - ◇ パパゲーノ： シカネーダー弟氏・・・背に大きな鳥かごを追っている鳥刺し。パーンの笛を吹き、歌う。名前は、古代フランス語のオウムを意味する「パパゲー」に由来。夜の女王の侍女から銀の鈴が渡される。
 - ◇ 老婆（パパゲーナ）： ゲルル夫人・・・18歳と2分の醜い老婆。盆の上に水が入った大きな杯を持っている。
 - ◇ 2人の鎧を着た男： 黒い鎧を身に付けた男、かぶとの上で火が燃えている。
 - ◇ モノスタートス： ヌズール氏・・・ザラストロに仕えるモール人。奴隷の番人。名前は、ギリシア語の「孤立した人」に由来。
 - ◇ 3人の奴隷： ギーゼケ氏、フラーゼル氏、シュタルケ氏
- * シカネーダーは、javonischenと書いており、japanischenの書き間違いでないとするれば、「日本の」というよくある訳は不適切で、架空の国と考える方が良いかもしれない。

10月7日、10月8日に書かれたバーデンで療養中の妻に宛てた手紙で、オペラの様子が伝えられる。

金曜日10時半

夜

最愛、最上のかわいい奥さん！

たったいま、オペラから戻ったところ。——いつものように超満員だった。——第1幕の「男と女は」の2重唱やグロツケン

シュピールのところは、例の通りアンコールを求められた。——それから第2幕の童子たちの3重唱も同様だった。——でも、いちばんぼくがうれしいのは、静かな賛同だ！——このオペラの評価が、日ごとに高まっていくのが分かる。…（中略）…それから、シュタードラーのための Rond 楽章を、ほぼオーケストレーションをし終えた。その間、プラハのシュタードラーから手紙をもらった。

シュタードラーのための Rond 楽章、これは、モーツァルトが魔笛の次に「自作全作品目録」に記入したクラリネットのための協奏曲イ長調 KV 622 である。彼はプラハに滞在中のアントーン・シュタードラーに楽譜を送り、協奏曲は10月16日、プラハ国民劇場で初演された。

土曜日10時半

夜

最愛、最上のかわいい奥さん！

ぼくのオペラから戻って、きみの手紙をみつけたとき、どんなにうれしく、喜んだことか。——土曜日は、いつも郵便日なので入りが悪いのに、オペラは大入り満員。例のように拍手喝采、なんども繰り返して演奏された。——あした、また上演される、でも、月曜日はお休みだ。——そこで、ジュスマイヤーは火曜日にシュトルを連れてくるといい。…（中略）…

きょうは朝早くから打ち込んで書いていたので、1時半までかかってしまった。——そこで、ホーファーのところへ大急ぎですっ飛んで行った（ひとりぼっちで食事をしたくないばかりに）、そうしたら、そこでママにも出会った。食事のあとすぐに、ぼくはまた家に戻り、オペラの時間まで書いた。ライトゲープがもういちど連れて行ってくれと頼むので、そうしてあげた。——あした、ママを連れて入る。——すでにホーファーは、あらかじめ台本を読むように彼女に渡している。——ママとしては、オペラを聴くというよりも、まあ観るほうだろうね。——

きょう…（ニッセンの手により末梢）…たちが、栈敷席に来ていた。——…（ニッセンの手により末梢）…たちはどの曲にも割れるような拍手を送っていたが、例の知ったかぶり屋は、まさにバイエルン風まる出しなので、ぼくは居たたまれなくなったほどだ。さもないと、バカ野郎呼ばわりしていたにちがいない。——ぼくはあいにく、2幕の始まり、つまり荘重な場面でそこに居合わせたのだ。——あいつはずっと笑い通していた。初めのうちはぼくもこらえて、やつの注意をいくつかのせりふの方へ向けようとした。ところが、やつは万事笑い飛ばしているじゃないか。——そこでぼくはとうとう我慢できなくなり——やつを「パパゲーノめ」と呼び捨て、外へでた。——でも、あのとんまにはその意味が分らなかったと思う。——それからぼくは、別の栈敷へいった。そこにはフラムが奥さんと連れだって来ていた。そこはみんな楽しかったので、ぼくは最後までいた。——

ただし、パパゲーノがグロツケンシュピールでアリアを歌うときには、舞台そでに上がって行った。きょうはどうしても自分であれを演奏してみたかったからだ。——そこでぼくはいたずらをして、シカネーダーが一度ちょっと休む場面に、アルペッジョを鳴らしたのだ。——やつは驚いて——あたりを見まわし、ぼくを見つけた。——2回目のとき、ぼくは何もしなかった。——するとやつは止まってしまい、それ以上さきに進もうとしなかった。——ぼくにはやつの考えが見抜けたので、もう一度和音を鳴らし



てやった。——するとやつはグロッケンシュピールをやみくもに鳴らして、「うるさい！」と怒鳴ったのだ。——そこでみんなどつと笑った。——このいたずらのおかげで、やつが自分で楽器をたたっているのではないことが、大勢の人にはじめて分かったと思う。——とにかく、オーケストラに近い桟敷席にいと、音楽がどんなにすばらしく聞こえるか、きみには想像もつかないだろう。——天井桟敷で聞くよりもずっといい音だ。——帰ったらすぐに、きみ自身ためしてみるといい。——

モーツァルトが朝早くから打ち込んで書いたのは、11月15日、「自作全作品目録」への生涯最後の記入となった、フリーメイソン小カンタータ「われらが喜びを高らかに告げよ」KV 623か、もしくは、未完に終わった死者のためのミサ曲（レクイエム）二短調 KV 626であった。ヨーゼフ・ライトゲープは、ザルツブルク出身の仲の良いホルン奏者でモーツァルトは「ろば・牡牛・馬鹿のロイトゲープを憐れんで」彼のためにいくつかの協奏曲を作曲している。当時彼は59歳。最後のホルン協奏曲二長調KV 412+514 (386b)は、モーツァルトの死後、1792年4月6日にジュースマイヤーが完成させた。この手紙には、モーツァルトの死後、1809年にコンスタンツェと再婚したゲオルク・ニコラウス・ニッセンが抹消した個所がある。ニッセンは、モーツァルトの伝記を美談でまとめるにあたり、手紙が公開される前に、差し障りのある部分を抹消したのだと考えられている。ニッセンが抹消した部分に誰の名前が書かれていたのかは今もって不明である。ライトゲープとも言われているが、「バイエルン風」とあることからヴィーン生まれのライトゲープではないと思われる。いずれにせよ、この知り合いの態度に激怒したモーツァルトがその憂さ晴らしにグロッケンシュピールでいたずらをしたのかもしれない。鍵盤付きグロッケンシュピールは、鍵盤と連結された固いハンマーで金属の音板を叩く構造の楽器で、明るくきらびやかな音がする。しかし、残念ながらグロッケンシュピールを手に入れることは極めて困難でチェレスタで代用せざるを得ないのが現状である。チェレスタのハンマーはフェルト製なので暗くやわらかい音になってしまう。本日の演奏ではチェレスタを使用していることをご承知おきいただきたい。

11月5日、ヴィーン新聞に次の広告が掲載された。

「魔笛」。皇帝陛下にお仕えする現職楽長モーツァルト氏のオペラから、種々のクラヴィア伴奏用声楽曲が、ラウシュ楽器楽譜商会で入手できる。

モーツァルトが11月14日から15日にかけて書かれた、現存する彼の最後の手紙にも「魔笛」の上演のことが触れられている。

最愛、最上のかわいい奥さん！

きのう、13日の木曜日、ホーファーはぼくを連れ出してカールのところへ行った。そこでぼくらは昼食をとってから、みんなでヴィーンに戻った。6時にぼくは、馬車でサリエリとカヴァリエーリ夫人を迎えに行き、桟敷席に案内した。——それから急いでホーファーのところへ、その間待たせておいたママとカールを迎えに行き、サリエリたちがどんなに愛想がよかったか、きみには想像もつかないだろう。——2人とも、ただぼくの音楽だけではなく、台本も何もかもひっくりかえり込んでくれたことか。——彼らは口をそろえて言っていた。「これこそオペラだ。——最大の祝祭で、最高の王侯君主を前に上演されて恥ずかしくないものだ。——きつとまたなんか観に来よう。こんなにすばらしい、気持ちよい出し物は見たことがないの。」

彼はジンフォニー（序曲）から最後の合唱まで、実に注意深く、観たり、聴いたりしていたが、「ブラヴォー」とか「ベッコ（美しい）」とか、およそ感嘆の言葉を吐かなかった曲はなかった。そしてぼくの好意に対して、いつまでも繰り返してお礼を言っていた。彼らはきのうぜひオペラに來たいと思っていたそうだが、なにしろ4時にはもう座席に坐ってなくてはならなかったからね。——そこできょうは、桟敷席で落ち着いて観たり聴いたりできたというわけだ。——劇場がはねたあと、2人を家まで

馬車で送り届けさせて、ぼくはカールと一緒にホーファーのところで食事をした。——それからカールを連れて家に戻り、ふたりともぐっすり眠った。

カールは、モーツァルトの次男カール・トーマス。モーツァルトとコンスタンツェは6人の子供を授かったが、4人は短命で、カール・トーマスと弟のフランツ・クサヴァーのみが長生きした。この時、カールは、7歳。モーツァルトによると、このオペラが機械仕掛けの大スペクタクル劇だったこともあり、「オペラに連れて行ったので大いに喜んだ。」そうだ。カヴァリエーリ夫人はジングシュピール「後宮からの誘拐」KV 384の初演の際、コンスタンツェ役を演じたカタリーナ・カヴァリエーリである。当時、ウィーンの宮廷楽長だったアントーニョ・サリエーリは、モーツァルトの才能を認め良き理解者であった。モーツァルトによると「魔笛」人気は、初演以後日増しに高まっていった。しかし、フリーメイソンを擁護したヨーゼフ2世とは打って変わり、あとを継いだレーオポルト2世はフリーメイソン弾圧を始めた。12月10日付のベルリンの「音楽週報」には次のニュースが掲載されている。

ウィーン。10月9日、新作の機械仕掛芝居の「魔笛」、われらが楽長モーツァルトの音楽つき、は舞台装置に多額の費用をかけ豪華絢爛と上演されているが、期待されたほどの喝采を得てはいない。というのも、作品の内容と台詞とがあまりにも劣悪すぎるからである。

11月6日付のツインツェンドルフ伯爵の日記にも次のように記されている。

6時に、ウィーン郊外にあるシュターレムベルクの劇場のアウエルスペルク夫妻の栈敷席で「魔笛」24回目の上演を聴く。音楽と装置は綺麗だが、ほかは信じがたいほどの茶番劇である。

12月5日月曜日、午前0時55分、モーツァルトは35歳の若さで息を引き取った。臨終に際して、カトリックの神父は、終油の秘蹟に訪れることを拒み、遺体はメイソンの黒装束で棺に納められた。翌日午後3時、聖シュテファン大聖堂に遺体を納めた柩が運び込まれ、大聖堂内陣の十字架礼拝堂に安置されて最後の祝福が行われた。葬儀の参列者には、親族として、義妹のゾフィー、初恋の人・義姉のアロイージャ、夜の女王を演じた義姉のヨゼーファ、アロイージャの夫ランゲ、ヨゼーファの夫ホーファー、義母（ママ）ツェツィーリア。友人としては、ヴァン・スヴィーテン男爵、サリエーリ、ジュースマイヤー、ローザー、オルスラー、アルブレヒツベルガー、フライシュテットラー、弟子のハートヴィヒ、フルーティストのショル、ヨーゼフ・ダイナー、シカネーダーとシカネーダー一座でザラストロ役のゲルルとタミーノ役のシャック、そしてアイブラーと2人の医師、クロセットとザラーバであった。モーツァルトが、1787年4月4日に病床の父に送った父への最後の手紙に彼の死生観が表明されている。

死は（厳密に言えば）ぼくらの人生の真の最終目標ですから、ぼくはこの数年来、この人間の真の最上の友とすっかり慣れ親しんでしまいました。その結果、死の姿はいつのまにかぼくには少しも恐ろしくなくなったばかりか、大いに心を安め、慰めてくれるものとなりました！そして、死こそぼくらの真の幸福の鍵だと知る機会を与えてくれたことを（ぼくの言う意味はお分かりですね）神に感謝しています。——ぼくは（まだ若いとはいえ）ひょっとしたらあすはもうこの世にはいないかもしれないと考えずに床につくことはありません。——でも、ぼくを知っている人はだれひとり、付き合っていて、ぼくが不機嫌だとか悲しげだとか言えないでしょう。——そして、この仕合せを毎日ぼくは創造主に感謝し、隣人のひとりひとりにもそれが与えられるよう心から祈っています。——

フリーメイソンの目標は、古い生を死に、そして新しい生で自己変容することにある。「魔笛」の第1幕第19場の結びの合唱で歌われるように「徳性と正義が大道と名誉をもておおうとき、その時、この世は天国となり、死すべき人も神々にひとしいものとなる。」「魔笛」では、第1幕は夜の女王側の立場で話が進み、第2幕はザラストロ側の立場で話が進む。そのため、話が混然としており首尾一貫していないと理解されることが多い。しかし、このオペラの真髄はタミーノとパミーナの参入儀礼にあり、第1幕第14場でパパゲーノとパミーナによって歌われる「男と女、女と男は、神にまでいたる」ことにある。第2幕第28場では、鎧を着た男が徹かに言う「死の恐怖を克服しうる時、大地の中から天に舞い上がる」と。

(2014年12月16日)

【参考文献】

1. Vorgelegt von Wolfgang Plath: Wolfgang Amadeus Mozart, Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie IV: Orchesterwerke, Werkgruppe 11, Band 10 (Einzelstücke): Maurerische Trauermusik KV 477 (479a), Bärenreiter Verlag (1978).
2. Howard Chandler Robbins Landon: Wolfgang Amadeus Mozart, Maurerische Trauermusik KV 477 (479a), Bärenreiter Verlag (2005).
3. Harald Heckmann: Wolfgang Amadeus Mozart, Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie II: Bühnenwerke, Werkgruppe 6: Musik zu Schauspielen, Pantominen und Balletten, Band 1: Chöre und zwischenaktmusiken zu Thamos, König in Ägypten von Tobias Philipp Freiherrn von Gebler (1726-1786) KV 345 (336a), Bärenreiter Verlag (1956/1990).
4. Harald Heckmann: Kritischer Bericht, Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie II: Bühnenwerke, Werkgruppe 6: Musik zu Schauspielen, Pantominen und Balletten, Band 1: Chöre und zwischenaktmusiken zu Thamos, König in Ägypten (1970).
5. Gernot Gruber und Alfred Orel: Wolfgang Amadeus Mozart, Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie II: Bühnenwerke, Werkgruppe 5, Band 19: Die Zauberföte KV 620, Bärenreiter Verlag (1970).
6. Dietrich Berke : Wolfgang Amadeus Mozart, Die Zauberföte, Eine deutsche Oper in zwei Aufzügen KV 620, Klavierauszug nach dem Urtext der Neuen Mozart-Ausgabe von Martin Schelhaas, Bärenreiter Verlag (2007).
7. Jochen Reutter : Mozart, Drei geistliche Hymnen nach den "Thamos"-Chören, Carus-Verlag (1994).
8. Howard Chandler Robbins Landon: 1791 Mozart's Last Year, Thames and Hudson (1989).
9. Neal Zaslaw: Mozart's Symphonies – Context, Performance Practice, Reception, Clarendon Press Oxford (1989).
10. Alan Tyson : Mozart, Studies of the Autograph Scores, Harvard University Press (1987).
11. 高橋英郎 : ミューズの子モーツァルト 母と子の音楽図書館, 音楽之友社 (1996) .
12. ジャック・シャイエ著, 高橋英郎, 藤井康生訳 : 魔笛 秘教オペラ, 白水社 (1976) .
13. アッティラ・チャンバイ, ディートマル・ホラント編, 海老沢敏, 畔上司訳 : モーツァルト魔笛, 音楽之友社 (1987) .
14. 吉村正和 : フリーメイソン, 西洋神秘主義の変容, 講談社 (1989) .

15. キャサリン・トムソン著, 湯川新, 田口孝吉 訳: モーツァルトとフリーメーソン, 法政大学出版局 (1983) .
16. 高野紀子 訳: 最初期のモーツァルト伝, 音楽之友社 (1992) .
17. パウル・ネットウル著, 海老沢敏, 栗原雪代 訳: モーツァルトとフリーメイソン結社, 音楽之友社 (1981) .
18. スタンリー・セイディ編, 中矢一義・土田英三郎 日本語版監修: 新グローヴオペラ事典, 白水社 (2006) .
19. オットー・エーヒ・ドイチュ, ヨーゼフ・ハインツ・アイブル 編, 井本响二 訳: ドキュメンタリー モーツァルトの生涯, シンフォニア (1989) .
20. 海老沢敏, 高橋英郎: モーツァルト書簡全集II, 白水社 (1980) .
21. 海老沢敏, 高橋英郎: モーツァルト書簡全集V, 白水社 (1995) .
22. 海老沢敏, 高橋英郎: モーツァルト書簡全集VI, 白水社 (2001) .

次回予告

第61回定期演奏会

6月27日 (土) 午後2時開演

豊中市立アクア文化ホール